

『東海の社会』 1965年4月（東京書籍）

## 新教科書の活用

国立教育研究所 矢口 新

### 1

例をあげて考えてみよう。三年生の上巻の第一の単元は「市や村のようす」となっている。これはどんな書き方になっているか。書き方というより、表現されたものの構造といった方がよいかもしいない。どんな立場の人が書いているのか。どんな順序で内容がなげられているのか。あるまじった部分部分は、それぞれどんな種類のこゝであるのか、といったことを考えてみる。

第一単元の最初のページは、問題を提出したページといってよい。きわめて一般的によびかけている。「わたしたちのすんでいるところは、どのようなところでしょうか」となっている。次には、そのどのようなというのを、もっと細かく、どのあたりに人が住んでいるか、とか、店や工場はどこにあるかとかいったこゝが出ている。つまりどのようなというこゝをくわしく言い直したのである。これはつまり、子供にこれから考えるこゝは何であるかを述べたものである。

この部分は、おぼえるとかいうこゝは全然必要ないところである。この部分を児童が読めば、自分の住んでいるところを調べるのだなということがわかるし、同時にどんなところかを自分で考えていくであろう。「店や工場などはどこにあるか」などというところを読めば、ああ、あそこだとか、あっちの方だとかをそれぞれの経験から思い浮べるであろう。

次のページからは、がらりとかわっている。こんどは一般的によびかけたものではない。或る組の児童が、自分たちの活動した経過を報告したという形

態の記述になている。そしてその活動の結果、その組の児童の住んでいる地域についてわかったこゝが記述されている。この部分も読んでおぼえるといった類のこゝはない。生徒のやるこゝは、自分の住んでいる地域をしらべるこゝであり、この記述はその参考であり、ひとつの事例であるにすぎない。

児童はこれを参考にしながら、自分の地域を調べていくであろう。これまでも経験して知ているこゝであるが、それを秩序立て、理論的に見てゆくのである。そのモデルが教科書にあるというわけである。つまり、児童が身につけるこゝ、定着させるこゝは、地域社会の見方である。どこがどうなているといった断片的なこゝでなく、筋道を身につけるのである。教科書を使うというこゝは、こういう筋道をはっきりよみとるというこゝになるであろう。

この部分では、その筋道をたどるには、地図という道具が使われている。これを自由自在に使いこなすこゝができるというこゝが、地域社会を見つているこゝにもつながる。自分で地図を書き、教科書の地図をよみ、くりかえして地図を使いこなす練習をさせなければならない。教科書の絵地図と地図などが何回も出て来るのは、くりかえしの練習のためである。それはただ地図の記号をおぼえるといふこゝばかりではない。それが自然におぼえられるように、何回もくりかえして地図を使うこゝである。地図を使つて、地域社会を筋道をたてて見る練習をするこゝである、この見方の訓練が大切である。

### 2

地域社会を見る筋というのは、第二單元になると、第一單元とはちがった姿をあらわしている。ここは社会科学でいう大量観察の統計的方法を使っている。そういう方法の極く初歩のものを使っている。この單元も最初の一ページでは、児童に問題を提出してよびかけている。それからの手法も全く第一單元とおなじである。よびかけられた生徒は、それぞれに多少の知識をもっているが、それを、一定の科学的な見方によって、筋道をたてて整理するわけである。こういう一定の方法を使わなければ他の土地と比べて、自分の地域がどういう特色を持っているかということも明らかにすることができないわけである。

またこの單元では、統計的な方法ばかりでなく、事例の観察、記述ということも使っている。つまり市街のようすを客観的に記述するということである。工場のようなすを記述して見るというのもそうである。理科でいう自然観察とよく似ている。その観察したものを相互に比べることによって、ひとつひとつの事実を明らかにするのである。

このような社会の見方もまた児童にくりかえしやらせなくてはならぬ。その観察の対象は児童の住んでいる地域社会であるが、その方法論は教科書に記述してあることを注意深く読むことによって知ることができる。知ったものを使ってみること、くりかえすことが児童の頭脳を訓練することになるのである。

### 3

以上は三年生の教科書の例をとって、教科書の使い方を述べたものであるが、今度は四年生をみてみよう。四年生上巻の第一單元は、むすびあう市や町や村という單元となっている。その全体の構造は三年生と同様だといってよい。

学習のねらいという所は、三年生の場合とおなじように、これから生徒のすることを問題の形で提起しているのである。これを読めば、生徒は、あれこれと想い浮べたり、意見を言ったりすることがあるであろう。それをただ思いつくままに羅列するのではなく、やはり秩序立てて見て行くのである。

最初に出て来るのは、空間の把握の仕方である。地図を道具に使ってみるということで、これも三年生と同様である。そして次に、静岡県由比町の例が出て来ているが、これは全くの事例であって、生徒がここから得るものは、方法論である。交通による結びつきというものをどのように順序を立てて見てゆくかということである。その一つの事例が由比を通して語られているのである。産業についても同様である。一つの地域の産業がどのように周囲の土地と結びついて成立しているか、市場や原料やさまざまな関係が語られている。そういうものを児童は自分の土地を材料にして把握してゆく。その間に社会のつかみ方を練習するのである。

### 4

四年生上巻の第三および最後の單元は、これまで述べたのと多少異なった性格の單元というか、ニュアンスがちがっているような感を与える。地域社会の開発のいくつかの事例があがっている。第三の單元は地域開発における協力のあり方を記述しており、第四の單元は、個人の力の意義を記述している。これらの單元の中味も、そのこと自体は単なる一つの事例にすぎない。さまざまな類型の地域開発のあり方、筋道を比較検討して、自分の地域社会の開発のあり方を考察する参考とするためのものである。だからこれらのさまざまな形の開発が比較考察されて、その性格を明らかにすることが、児童の研究問題とならなければならない。そうすることによって、自分の住んでいる地域社会の中にも、どこかに、それに似たような事例を発見することができなくてはならない。史料が残っていないために、詳しくさぐることができないとしても、そういう類型の仕事がどこかに存在することは自覚しなくてはならぬわけである。

### 5

五年生の上巻は、以上のような地域社会の見方を土台にして、日本という社会を問題にするのである。これまで述べたのは上巻の例をとっているわけであ

るが、各学年とも、下巻も大体同様な方針をとって記述がなされており、児童に勉強させる点は同様なことである。五年生はそれを土台として、社会のひろがり日本という全体社会になっているわけである。

これは或る意味で、三年、四年に行なったことのくりかえしだとも言えるのである。つまり社会の考え方、見方という点からみれば、くりかえしといってもよいのである。

更にこのくりかえしは、六年生になると世界の国々という所にあらわれて来る。国というものもある意味で地域社会である。自分の住んでいる郷土という地域社会、国という地域社会を分析し、把握することを練習した児童が世界の国々をみて行く時にも、その方法をつかって見て行くわけである。

そこで、高学年になったら前学年の教科書を使って、どのような筋道で社会を把握したかを整理してみるというようなことをしたらよいと思う。そこに自分の見方の発展ということを実感することができよう。社会をみて行く筋が次第に精細になっているということの自覚が大切なのである。どこがどう精細になったかということが自覚されていることが、見方の成長なのである。そういう意味で、教科書がもっと有機的に使用されてよいものである。

## 6

六年の上巻には歴史の単元がある。これはこれまで述べた単元とはかなり性格のちがったものである。しかしよく考えてみると、時代ごとに社会の姿をとらえていると見ることができる。極めて大きな視野で社会をとらえていることになる。数百年の間の時代をひとつの社会としてとらえるということである。そうしてその見方は基本的にこれまで述べて来た社

会のとらえ方とちがっているわけではない。その筋道をたてて見るという点では同様だと考えてよい。

ただこの歴史の単元は、政治的な関係が中心となっている。政治の論理がとくにむつかしいことは否定し得ない事実である。そこで、とかく現象の羅列、その機械的説明ということになりがちなのがこれまでの歴史の取扱いである。併し大切なことは、筋道をたてて見るということである。ひとつの事実は必ず変遷すべきものである。つまり有限な事実である。ということは必ずそこに発展へのきざしをもっているものである。過去の事実についても、それは言いうる。それは必ず発展すべきものとして過去にもおかれていたわけである。それが変化となってあらわれる。その有限なるものの展開の筋道を学ぶことが、歴史において大切な点である。

教科書に書かれてあることは、そのような論理を根底にふくんでいる。その論理をよみとることが大切なのである。過去の歴史教育のように、事実の羅列と機械的な説明を主にした取扱いであってはならない。

## 7

以上例をあげて、教科書の内容をどのような考え方で取扱うかを考えて来たが、教科書にあることは、機械的に記憶すべきことではない。どれをとってみても、その叙述を通して考え方を児童につかませることである。それがまずはっきりと自覚されなくてはならぬ。それは教材を解説して、わかったか、わかったらおぼえておけというように言うことではない。児童が自分でそう考えることができるようになることである。そのためには、教科書を通り一ぺんに解説するのが教師の役目ではない。教科書は、ハンドブックのように使われるべきである。